

Eva Etzioni-Halevy,

The Divided People: Can Israel's Breakup Be Stopped?

Lanham : Lexington Books, 2002, x+185pp.

おくやま まち
奥山真知

I

オスロ合意から10年余り経過した今日、イスラエル・パレスチナ情勢はいっそう混迷の度をましている。このことは、オスロ合意を、パレスチナ国家樹立の第一段階であるかのように過大評価してきた日本を含む国際社会の認識の誤りを、結果として示すものである。イスラエル・パレスチナ問題がいつどのように解決しうるのかということは、多くの人々の関心を引きつける問題であると同時に、何よりも当事者である現地の人々が切実に解決を求めている課題である。しかし解決の方向や将来像は一樣ではない。イスラエル対パレスチナという対立だけでなく、双方の社会の内部自身に幾重にも対立軸が存在し、それぞれが求める方向は水と油のような関係とも思える。

こうした対立軸のひとつに、本書が分析の対象とした「世俗対宗教」という対立軸がある。イスラエル・パレスチナ問題の解決の鍵は、その社会を構成する人々の社会意識や政治意識の行方にあるという意味で、本書は興味深い議論を提供している。

さて、書評にはいる前に、イスラエルの社会変容について少し触れておく必要がある。今日イスラエルはこの5月で建国後56年を経過し、「ポスト・シオニズム」といわれる段階に入ったことが指摘されている。評者は、「ポスト・シオニズム」を過度に強調することは、現在のイスラエルの理解に誤解をもたらすものであると考えている。しかし、一定の限定された意味でなら、確かにそのように捉えること

のできる変化が生まれてきていることも事実である。

まず第1に、イスラエル建国に主導的な役割を果たした基本理念は労働シオニズムや社会主義シオニズムといわれるものであるが、この中にあった集団主義的な価値観は、もはやイスラエルでの中心的な価値観ではなくなっている。イスラエル生まれの新しい世代が過半数を超えたという状況は、移民としてイスラエル（パレスチナ）に渡って献身的に国づくりに参加するという生き方が過去のものになったということでもあり（今日も依然として移民の流入は続いているが、彼らの移住の動機は、もはや労働シオニズムや社会主義シオニズムによるものとはいえない）、またイスラエルの経済発展は、より個人主義的で物質主義的なライフスタイルをもたらすこととなった。

第2に、イスラエル建国期のシオニズムは、世俗的イデオロギーとして存在し、またヨーロッパで生まれ、主としてヨーロッパの（男性）ユダヤ人に担われた運動であった。言い換えれば、宗教的なユダヤ人、オリエント系のユダヤ人（ミズラヒムといわれる、非西欧に出自を持つユダヤ人）、女性は、シオニズム運動の中では内なる他者として疎外された存在であった。ところが、今日、これらの人々が社会的な存在感と政治的発言力を高め、世俗的・ヨーロッパ的なシオニズムを相対化するようになっているのである。

第3には、歴史学や社会学の新しい動向があげられる。従来イスラエルの社会科学は、シオニスト・イデオロギーの枠をほとんど超えることがなく、シオニズム運動の性質やイスラエルの建国の経緯を本質的に問う問題意識や視点が欠落していたといえる。しかし、1980年代の、特に後半以降、シオニスト・イデオロギーの「神話」を解体するような研究動向が現れている。彼らは「新しい歴史学者」や「批判的社会学者」といわれる研究者達で、伝統的なイスラエルの歴史学や社会学の言説に異議をととなえ、批判的な問題提起を行っている。

本書もまた、こうした研究動向から影響を受けているが、著者自身は「批判的社会学者」ではない。なお、彼女の勤務しているパール・イラン大学は、宗

教的な大学として知られるが、学生の多くは世俗的であるといわれる。本書の中で彼女自身は自己の立場に言及していないが、幼いときに宗教的な教育環境にあったと述べている。

II

本書の構成と内容は以下のとおりである。

第1章「序文——分裂した民族——」では、今日イスラエル社会の世俗的なユダヤ人と宗教的なユダヤ人の溝が深まり、イスラエルを解体させるような深刻な事態に直面していることが指摘される。そして、多文化主義的な社会と比較しながら、イスラエルが陥っている事態は多文化主義社会の現象ではなく、イスラエルとその民主主義に脅威をもたらす「分裂」とみべきであることが強調される。この2つの（聖と俗の）「世界」は、世界観においても、イスラエルのあるべき姿についても価値観を共有できず、お互いに相手から脅かされていると感じながら相手を否定するという非寛容が増幅し、文化的にも社会的にも2つの異なる社会になっているとみるのである。著者は、こうした状況をもたらした要因には、イスラエルをとりまく戦時状況やポストモダンの知的風潮に加えて、イスラエルの諸領域のリーダー達（政治家、知識人、メディア関係者、宗教指導者など）が権力内での自らの立場を強化するために、火をつけ育てているという側面があることを重視する。そして、本書の焦点を、社会の分裂という危機的状況を打開するために、何が問題なのかを認識することであると位置づけている。

第2章「鳥瞰図」では、世俗的および宗教的な各界のリーダー達が、双方を互いに敵視し、いかに対立をあおりまた深める役割を果たしてきたかが説明される。各リーダー達は、相互に相手のものの見方を否定し排除するだけでなく、相手側の存在自体を否定するまでに寛容さに欠けていること、社会を二分させるこの各リーダー達の言動はイスラエルの民主主義をそこなうものであること、結果としてイスラエルのユダヤ人を束ねている共通のアイデンティティを壊すことに加担していることなどが指摘され

る。また、評者が第1節でも述べたことであるが、社会学や歴史学、人類学などの「ポスト・シオニスト」研究者がユダヤ・シオニスト国家としてのイスラエルのあり方や存在の正当性に疑問を投げかけ、ユダヤ人の共通のアイデンティティを壊す動きを加速させたことを例証している。

第3章「特別なのは誰か——セクトからコミュニティへ——」では、建国前からの主要な政治勢力とその支持者の関係とその推移、新しい勢力の台頭が整理される。著者がここで特に重視しているのは、それぞれの政治勢力が、物質的恩恵を付与することを競争しあうことで有権者の支持を得ようとしてきた点である。こうした利益誘導型の政治システム自体は維持されながら、その主導権は、かつての労働党（マバイ）から超正統派をはじめとする宗教勢力（特にシャス党）に移っている。今日の構図を図式化すると、(1)宗教諸政党（特にシャス党）の支持者は、概してイスラエルの中で不利な境遇にあるミズラヒムである。(2)宗教諸政党（特にシャス党）は連立政権に加わってキャスティングボードを握り、その立場を利用して政府から「特別補助金」をひきだす一方で、支持者にそれを還元して支持基盤をつなぐ。(3)しかしこうした「補助金」は、結果として正統派および超正統派の人々に偏って割り当てられ、その他の（世俗的）社会から切り離された自足的な宗教教育システムや居住空間をつくることにつながり、世俗的な人々と宗教的な人々との分裂はいっそう増幅するということになる。

第4章「世俗的な人々と宗教的な人々——自分のやり方でやるさ——」では、「宗教的なユダヤ人」の定義には結論がないとしながらも、正統派、宗教的、伝統主義者、世俗などの概念を用いて、それぞれの人々の割合や、戒律の実施状況、信仰への意識調査の結果、それぞれの出生率や学校のタイプ別にみた児童数の割合などを紹介し、聖と俗の勢力の現況について考える材料を提供している。そのうえで、世俗的な人々の数が宗教的な人々の数を上まわるとは必ずしもいえないこと、世俗と宗教が二極分解している（宗教的な人々は宗教的遵守にますます厳格になり、世俗的な人々はテクノロジーの進歩と消費

文化の中で宗教的規律や習慣から離れますますます世俗的になる) こと, 社会の世俗化の流れが宗教的な人々の危機感を強めて彼らはいっそう厳格になり, 両者はさらに乖離していくという悪循環が指摘される。

第5章「別々の時空間」では, 第4章で指摘された悪循環の具体例が示される。教育, 軍隊, 住宅地, 家のづくり, 余暇の過ごし方, 消費様式, 音楽から放送局, ユーモアに至るまで, 両者の世界はそれぞれ独自のものになり, 職場や兵役以外では顔を合わせる共通の場所もほとんどない (しかも超正統派・正統派のほとんどは, 兵役から免除される)。お互いに相手の時空間には疎外感を, 自らの時空間には快適さを感じ, ますます時空間の棲み分けが進み, 別々の生き方が再生産される。著者は, こうした状況は社会解体の前兆であるとみる。

第6章「2つの文化の物語」では, 第5章にひき続き, 宗教的な人々と世俗的な人々の分裂状況が, 国民の「宗教」, 儀式や通過儀礼, 個人のアイデンティティの象徴である名前や服装, 言葉使いなどの領域での比較を通して語られる。これまで人々をまとめるうえで機能してきた共通の体験やシンボルの力が衰退し, 両者が異なる生活世界で生きていることが繰り返し強調される。

第7章「それでもひとつの民族なのか——ユダヤ人アイデンティティの崩壊——」では, イスラエルのユダヤ人社会を結びつけていたユダヤ人アイデンティティが, 崩壊, 分裂しだしていることが説明される。出自, 文化, 集合的記憶, 宗教などの共通性といったこれまで集合的アイデンティティの基盤として機能してきたものが共有されなくなりつつあるのである。特に, 第2世代以降の世俗的な人々のユダヤ人アイデンティティの弱体化が著しいとし, その背景には, 宗教勢力と世俗勢力の分極化, 新しい世代の脱宗教化があるとしている。こうした傾向は今後も続いていくとしながらも, 多くは両勢力の指導者達にかかっているとして, ユダヤ人アイデンティティの「復権」を説く第10章および第11章の伏線となっている。

第8章「もはや一体ではない——イスラエル人ア

イデンティティとシオニストの関与——」では, イスラエル人アイデンティティもまた, ユダヤ人アイデンティティと同じように凝集力を失いつつあることが考察される。著者は, 「右」と「左」の政治的対立 (著者はこれが宗教的な人々と世俗的な人々にほぼ対応しているとみる) が政治的な分裂の次元を超え, 集合的アイデンティティの分裂に至っていることを深刻に捉える。つまり, 「右」≡宗教的な人々はよりユダヤ人アイデンティティに, 「左」≡世俗的な人々はよりイスラエル人アイデンティティに自らを重ねており, 目的を共有することが困難になっているからである。さらに著者は, イスラエル人アイデンティティの基盤であったシオニズムが凝集力を持ちえなくなったことが, この傾向を促進していると主張する。シオニズムは, 急増する超正統派によって否定され, ポスト・シオニストによって批判され, さらに個人主義的な生き方の新世代には色褪せたものになり, かつてのようなイスラエル (ユダヤ) 国民を束ねるイデオロギーとしての正当性を失ってしまったのである。国家のアイデンティティを支える「共通の運命」や「共通の目的」という感覚がこうして侵食されている。

第9章「ラビンの暗殺の果てに——民主主義への脅威——」では, これまで述べられたイスラエル社会の亀裂を民主主義と関連させて説明がなされる。今のイスラエルが, 国家の正統性に合意をみいだせず, 集合的アイデンティティを成り立たせる社会の公分母も崩壊し, 社会に深刻な亀裂が生じていることを再度指摘したうえで, そのことが, 民主主義の崩壊につながることを警告している。なぜならば, 人々の亀裂や対立は, 政治的な対立の次元を超え, 今や自らの存在やアイデンティティ, およびイスラエルのアイデンティティと未来を賭けたものに (傍点評者) なっており, 政府や政府の行動の正統性をめぐって評価が分裂し, 民主主義の支配への合意と信頼が失われ, お互いを「民族の敵」や「犯罪者」とみなすほど非寛容で排他的な社会になっているからである。

第10章「われわれはここからどこへ行くのか」は事実上の結論の章であるが, 第9章まで述べてきた

イスラエル社会の分裂の打開策として、著者は、社会の公分母となるシンボルと価値の創出と再構築を提言する。その鍵となるのは、世俗的な人々も共有しうるユダヤ的な儀式と、言葉、ユダヤ教（ユダイズム）に内在する普遍的で人間的な価値である。著者によれば、ユダヤ教（ユダイズム）が持っている寛容で倫理的な側面に息を吹き込むことは、世俗的な人々にユダヤ教への親近感と「世俗的なユダヤ人アイデンティティ」を持つことを促し、さらには宗教的な人々のユダヤ人アイデンティティにも変化をもたらし、世俗的な人々と宗教的な人々の亀裂が緩和される。人々は互いに異なる信条やライフスタイルを持ちつつも、ユダヤ人としてのアイデンティティが共有されることで社会の凝集性は強まり、民主主義も安定する。そのための行動を、著者はまず宗教的な指導者に呼びかけている。

第11章「結論——可能性を信じて——」では、第10章の主張が再び繰り返される。すなわち、イスラエルの危機的な状況を脱出するために、凝集性を強めるような公分母、言い換えれば共通性をもたらすシンボルと価値を構築（再構築）していくことに希望が託される。そこでの鍵概念は第1に、「世俗的なユダヤ人アイデンティティ」である。同時に著者は、世俗的な指導者に、西洋の自由主義の原則をまず自らに厳しく適用し、教条主義を自省することを求めている。そうすることで宗教的な人々に自由主義への関心をよびおこすことが可能になるとする。そして、これからの新しいすべての指導者は、ともに評価しうるようなシンボルと価値の種をまき、育て、それぞれの相手側の人々に（傍点評者）語りかけ、イスラエルのユダヤ人社会の連帯意識を高めていくことが必要だとまとめている。

III

本書が執筆された背景としてシャス党の躍進があったことをみておく必要がある。シャス党は1984年非シオニスト超正統派宗教政党のアグダット・イスラエルからミズラヒム系が分裂して生まれた比較的新しい政党であるが、99年の総選挙で（国会議員

の定数120議席のうち）17議席を獲得し、労働党、リクードに次ぐ3番目に大きな政党勢力になったのである。ちなみに、その後の2003年の総選挙では、議席を11に減らしたが、依然として大きな影響力を持つ政党であることに変わりはない。著者が第3章で指摘しているように、シャス党が補助金や助成金の利益誘導をはかりつつ有権者の支持を得る一方、国会ではキャスティングボードを握り発言力を高め、「世俗的」人々の大きな反発をかうという図式が存在しているからである。

さて、本書のタイトルである「分裂した民族」に使われている“people”という概念は、国民という含意も持つ概念であるが、著者は「分裂した国民」という視点からこの問題を論じてはいない。評者は、このことをまず第1に問題にしたい。つまり、イスラエル国民には約2割のアラブ・パレスチナ人が含まれるが、著者がイスラエル人アイデンティティを語るとき、それはあくまでもユダヤ人のアイデンティティしか問題にしていないのである。もっとも、著者は国内のアラブ・パレスチナ人の存在を無視しているわけではない。「原則的には、それ（イスラエル人アイデンティティ—評者）にはイスラエルのアラブ人も含めるべきである」(p.122)とも述べている。しかし、「多くの調査結果は、彼らが自らを、イスラエル人というよりはパレスチナ人、またはイスラエルの市民権を持つアラブ人とみており、イスラエルのユダヤ人が自分たちのイスラエル人アイデンティティにアラブ人を入れるかどうかは疑問の余地がある」(p.122)として、それ以上この問題に立ち入ることを止めてしまっている。しかしこの問題は、イスラエルの将来を語るのであれば、避けて通れない重大な問題である。

なぜならばこの問題は、イスラエルの民主主義のあり方と評価にもかかわってくるからである。著者によれば、現在イスラエルの民主主義は、かろうじて健在であると評価されている。しかしもしイスラエルが、完全な宗教国家になったり、完全な世俗国家になって、宗教勢力か世俗勢力のどちらかが一方的に「勝ち組」になったとしたら民主主義は完全に破綻するとしている (p.173)。その意味で、ユダヤ

国家と民主主義国家の両立はありえないとするポスト・シオニストの立場には著者はくみしない。むしろ、「ユダヤ・イスラエル・シオニスト」という今のイスラエルの国家アイデンティティが挫折することこそが、民主主義の挫折をまねくと述べる(p.172)。しかしそうなのだろうか。ユダヤ人の凝集性の回復が、イスラエルのユダヤ人とアラブ・パレスチナ人の、新たな「分裂した国民」へとつながる序章になることはないのだろうか。さらに、現在のイスラエルで、ユダヤ国家の中のアラブ・パレスチナ人は、民主的に平等に処遇されているだろうか。評者は、ユダヤ国家としてのイスラエルが民主主義と両立することは原理的に困難であると考え。

次に疑問に感じたのは、アイデンティティの「分裂」と「解体」、「衰退」は違うのではないかという点である。著者は、このことを論じるとき、“split”や“breakup”, “erode”, “decline”などいくつかの概念を使い分けている。実態は、ユダヤ人アイデンティティについてもイスラエル人アイデンティティについても、「分裂」、「解体」、「衰退」のすべてが起こっているかもしれない。しかし、社会にもたらず帰結は一樣ではない。それぞれの作用を区別した厳密な議論が必要ではなかったかと思われる。この点については、そもそもユダヤ人アイデンティティは著者が語るように「衰退」しているのだろうかという疑問も抱いた。もっとも著者自身ある箇所では「調査結果は、ほとんどのユダヤ人は依然として強いユダヤ人アイデンティティを持っていることを示している」(p.109)とも述べている。にもかかわらず、「しかし、このアイデンティティさえも破れる方向に我々は進んでおり、イスラエルのユダヤ人社会をまとめる接着剤としてもはや機能しえない」(p.110)、と著者はその崩壊ぶりを強調する。この主張に説得力が欠けるのは、著者が引用しているデータと論の立て方に主な原因がある。議論の材料の多くは、既存の調査結果や新聞記事や雑誌、新聞広告や本からの引用、様々な人々の発言であるが、いずれも断片的であり、誇張してつい口がすべってしまったと理解すべきような内容も、文字どおりの意味として分析の根拠に使われていることも多い。さらに、その

断片的な引用をもとに推論がなされるという形で論が立てられ、実証性という点でも疑問が残る。アイデンティティを問題にするのであれば、世俗的な人々や宗教的な人々がそれぞれどのような内的世界をくみだしているのか、著者のいう「アイデンティティの解体」という視角から、内在的にえぐり出すような具体的な分析や考察をしてほしかったと思う。

さらにこのことに関連して、結論部分で提起される「世俗的ユダヤ人アイデンティティ」という概念がわかりにくく思われる。しかし、これは著者のせいというよりは、評者にユダヤ教に対する理解が欠けているためである。著者は、この概念を単に世俗的な人々のユダヤ人アイデンティティとして考えているのではないはずである。もしそうならば、今でもそういう意味での世俗的ユダヤ人アイデンティティは存在しているからである。著者がこの意味に込めているのは、ユダヤ教（ユダイズム）の中に存在している普遍的な価値やリベラルな要素に光をあて、それをもって、世俗的な人々が世俗的なライフスタイルを維持しながらもユダヤ的な遺産に誇りを感じることで生まれてくるようなユダヤ人アイデンティティなのである。著者は「世俗的なユダイズム」という表現もしているが、これが具体的にどのような形で可能であるのかを論じるには、ユダヤ教についての内在的理解が不可欠であると思われた。

次に問題にしたいのは、著者がイスラエル社会の亀裂を語るとき、その主な焦点は宗教的な人々と世俗的な人々との溝の深まりであるが、宗教的な人々は「右派」に、世俗的な人々は「左派」におおむね重ねられて議論されていることである。「宗教的な人々」の中にも亀裂があることが軽視されていることや、「世俗的な人々」を「左派」として一括りにしてしまうことは、亀裂を単純化し、現状認識に誤解をもたらすものである。宗教的な人々と世俗的な人々が対立し溝を深めていることは事実である。しかし評者は、イスラエルにおいて「右派」と「左派」という分類は有効な分析概念ではないと考える。確かに、政治的な争点において労働党などの「左派」勢力は和平交渉に積極的であり、占領地の返還にも妥協的である。しかし、こうした「左派」勢力やそ

れを支持する人々が、ユダヤ国家としてのイスラエルのあり方を放棄しているわけではない。言い換えれば、「右派」と「左派」はユダヤ人のための領土の必要性を受容し支持している点で、連続しているといえる。明確な断絶は、非シオニストと反シオニストにあるが、こうした確信犯の「左派」は、例外的ともいえるほど数は少ない。シオニズムは国民を束ねるイデオロギーとしてかつてほどの力を持ちえていないとしても、「安全保障」とのかかわりにおいて、大部分の人々を今もなおつないでいると評者は考える。

また、率直に言って、第9章までの考察の内容に対して、第10章と第11章の結論の提言が安易で唐突である印象がぬぐえなかった。「解体寸前」まで社会が二分し、相互の接触もなく、お互いを「敵」と嫌悪しながら反目しあい、別々の生き方が再生産されているということについて繰り返し強調された後に、第10章や第11章で述べられる新しい指導者の登場の契機はどこにあるのかという素朴な疑問が湧く。希望につながるような実験的な事例をいくつか紹介しているが、現段階ではこうした試みはあまりにも例外的である。著者は、「亀裂を緩和する処方箋を自分は持っているとは思わないが、アイデアは出され

るべきだ」(p.151)といているが、結果的には絵に描いた餅を処方箋として書いているようにも思える。確かに新しい価値とシンボルのいくつかの種はすでにまかれているかもしれないが、それに水をやり育てることを新しい指導者に求めることよりも、著者自身が冒頭で述べているように「何が問題なのかを認識すること」に徹底してとりくみ、まかれた種が育つのを疎外している正体を構造的に示してみせることの方が議論としては実りがあったのではないだろうか。いずれにせよ、「ユダヤ民主国家」というイスラエルの現在の公的な自己定義は、将来的にどのようなようになっていくのだろうか。矛盾を抱えながらこの定義のままでありつづけるのか、どちらか片方の規定をすてて「ユダヤ国家」、あるいは（すべての市民に平等な）「民主国家」に自己定義し直すのかという問題は、イスラエルにとって最大の社会的・文化的・政治的問題である。その方向性をめぐっては簡単には決着がつきそうにはない。本書は、こうした社会的・文化的・政治的文脈の中で、「ユダヤ民主国家」を前提にしたうえでのひとつの可能性に一石を投じている。

(常磐大学人間科学部教授)